

ポスター発表P-3

よい患者－看護師関係を築くための要素
～第一印象から現在までの
思いのプロセスを通して～

宮本 拓也¹⁾ 藤本真紀子²⁾

1) 青森県立中央病院

2) 青森県立保健大学

Key Words : ①第一印象 ②患者－看護師関係 ③思い

I. はじめに

患者－看護師関係の関心の高まりは、看護の専門性が成熟するにつれて生じたといわれていて、看護理論家が看護哲学と看護理論を発展させたことで、対人関係の重要さは明確になってきている。また、対人関係において、心理学の分野では、第一印象が重視されるという見解がある。しかし、患者－看護師関係において、数々の研究がなされているが、第一印象がその後の関係性にどのような影響を与えるかは、明らかになっていない。

II. 目的

患者の看護師への第一印象が患者－看護師関係に影響を与えるかを検討する。

III. 研究方法

1. 研究対象者：青森県内の某公立病院内科系病棟に一週間以上入院していて、状態が安定し意思疎通の可能で、研究協力が得られた患者。
2. 調査方法：対象の選定は、病棟看護師長の助言を得ながら進め、対象者の治療やケアなどに影響を与えない

時間にインタビューを行った。インタビューの内容は、①病院などにおいて看護師との関わりの中で一番印象に感じている場面、②その看護師の第一印象、③第一印象からその看護師に対しどのような思いや感情の変化があったか（変化を与えたきっかけやいきさつ）などである。

3. 分析方法：10事例をすべて、逐語録として作成した。その逐語録から対象者の看護師との関わりや思いが含まれる場面などを抽出し、それぞれの事例について、関連図に示し、対象者の看護師に対しての印象の変化を抽出した。分析は、信頼性、妥当性を高めるために担当教員と共に助言のもとに行った。

4. 倫理的配慮：面接にあたって、対象者毎に研究協力依頼書を示し、研究の意図と大まかな面接内容を説明した。プライバシーの厳守、答えた内容による不利益が生じないこと、得られたデータは個人を特定できないように処理し、研究以外の目的では使用しないことなどについて説明し、同意を得た。

IV. 結果

1. 研究対象者の属性：対象者は10名で、性別は、男性7名、女性3名であった。入院経験として、今回の入院が人生において初めての入院が3名であった。なお、今現在入院している病棟にて過去に入院経験がある研究対象者は5名であった。主な疾患名として、糖尿病6名、貧血症1名、胆のう炎1名、早期胃がん1名、潰瘍性大腸炎1名であった。

2. 第一印象から現在までの思いのプロセス：第一印象から現在までの思いの変化から5つの思いのプロセスパターンに分類された。その中から、第一印象がよく、現在もよい患者－看護師関係が築けていたと分類されたのが2事例であり、他の分類された事例と比べて、入院日数が7日、9日と比較的関わりが少ない日数であった。また、第一印象が悪かったり、悪くはないが薄い印象であっても、現在はよい患者－看護師関係が築けていたのが、5事例あった。

3. 第一印象から現在までの思いの変化に影響したこと：第一印象が悪かったり、悪くはないが薄い印象だったが、現在は、よい患者－看護師関係が築けていると判断されたのが5事例であったが、その5事例全てに共通する影響したこととして、看護師の関わりにおいて「親身になって言ってくれる」、「(具体的な栄養指導から)あなたの場合はって看護婦さんに言われて」、「(自分の日課やペースなど)色々、自分のことを分かってくれている」、「疑問に思ったことに対し、それは医師に相談したほうがいいと看護師が医師との仲介役になってくれた」など患者自身が看護師からの個別性のある関わりをしても

らったと認識していたことが聞かれ、具体的に個人として関わる看護介入が影響していると判断した。他にもこの5つの事例に共通することとして、入院日数が20日以上と長い、もしくは、以前に同じ病棟にて入院経験があるということが挙げられた。従って、物理的な看護師との関わりの長さが影響すると判断された。

V. 考察

1. 第一印象から現在までの思いのプロセスの変化から第一印象が与える影響について：アッシュ (1946) は、「最初に良い性格特性を与えられた被験者は、悪い性格特性を与えられた場合に比べて、そこに描かれた人物をより幸福で、社交性に富み、機知に溢れ、自制心のある人物とみる傾向にある」と述べている。つまり、最初の段階での第一印象が看護師との関係性において、良い性格特性が与えられ、社交性に富まれているために、コミュニケーションが円滑に図られるものと考えられる。また、看護師との第一印象と残っている場面を聞くと、受け持ちの看護師との話であり、一人の特定の看護師のことが語られていた。おそらく、第一印象がよかったために、そのあとの患者－看護師の関係性において、研究対象者が、他の看護師と比べて印象深く、一人の看護師との関係性ができたものと考えられる。

2. 第一印象から現在までの思いの変化に影響したことについて：看護師の関わりにおいて「親身になってくれる」、「(具体的な栄養指導から)あなたの場合はって看護婦さんに言われて」、「(自分の日課やペースなど)色々、自分のことを分かってくれている」など、患者自身が個別性のある関わりを受けたことを認識していたことに対して、患者という大きなくくりではなく、その人個人として関わる看護介入が影響していると判断した。伊藤 (2003) は、「患者にとって必要な援助とは、気がかりを解決する直接的なものだけでなく、気がかりを抱えた一人の人間として理解されることにもある」と述べている。このことより、「あなたの場合は」や「色々、自分のことを分かってくれている」といったように、一人の患者として分かってくれて、その人に対しての個別性に合わせた看護を提供すれば、入院生活において安心感と看護師に対しての信頼感を与えるものと考えられるため、よい患者－看護師関係が築けるのではなかろうか。また、第一印象が悪く、現在もよい患者－看護師関係が築けていない2事例には、患者を個人としての関わりは、語られていなかった。

VI. 引用文献

1. アッシュ (1946) / 斉藤勇 編 (1983) : 人間関係の心理学、誠信書房、p57

2. 伊藤祐紀子 (2003) : 患者－看護師関係における共感のプロセス、日本看護科学会誌、23 (1)